

自宅療養見守り 往診チームの力

大阪市、6診療所連携

問診・訪問 役割を分担 エリアごとと担当医師

新型コロナウイルスの「第5波」で大阪府内の自宅療養者はピーク時に1万8000人に達した。医療の目が届きにくい自宅療養者は急変時にいかに早期治療につなげるかがカギとなる。大阪市では6か所の診療所をつくる「往診チーム」が9月中旬から活動を始めた。急な往診依頼など単独の診療所では対応が難しいケースでも連携することによって対応が可能だ。往診する医師に同行した。

(東礼奈)

新型コロナ

■家庭内感染

9月24日午後1時30分、大阪市内のマンションに、往診チームでリーダーを務める葛西(かさい)病院院長の小林正宜(まさよし)さん(38)が到着した。患者は、糖尿病などを抱える50代男性。8月に2回のワクチン接種を終えており、「ブレイクスルー感染」だ

▲ 自宅で療養する50代の男性患者を廊下で診察する小林さん(9月24日、大阪市内) 〓 里見研撮影



往診チーム事務局の診療所で対応に追われる奥さん(左)と西岡さん(大阪市内)

った。

「せきが苦しくて眠れないことはありますか」

小林さんは玄関内で防護服を身につけ、廊下で診察を始めた。顔色や表情を見ながら症状を聞き、血中酸素濃度を測ると97%で軽症(96%以上)だった。「心配なことがあればいつでも電話してくださいね」と声をかけ、10日分のせき止めや解熱剤を手渡すと、約15分で終了した。

家庭内感染で同居の妻や母も陽性が判明。持病がある男性は保健所に入院を勧められたが、妻を自宅に置いていけず、入院した母の様子も気になって自宅療養を選んだ。「一度も医師に診てもらえないまま、熱が38度台まで上がって不安だった。薬もなく、往診に来てくれて助かった」。男性は安堵の表情を見せた。

■情報共有

大阪府保健所から、男性の往診依頼が入ったのはこの日正午前。往診チームでは、奥内科・循環器科院長の奥知久さん(41)らが事務局として依頼を受ける窓口を担っている。奥さんの知人で応援に来ていた諏訪中央病院(長野県茅野市)医師の西岡照平さん(28)がすぐに男性に電話をかけ、症状などを聞くと、当番だった小林さんに連絡した。

ここで2人の医師が連携するのがポイントだ。往診時に患者と接触する時間を短くして感染リスクを下げ、医師が患者宅に着くまでに、別の医師がオンライン診療で問診を進めておく。

西岡さんは画面越しに男性から持病や服用する薬、ワクチンの接種歴、喫煙の有無、症状などを聞き取ってシステムに入力。最後に「到着するまでに部屋の換気とマスクの着用をお願いします」と伝えた。チームは30〜40代を中心

■次への備え

府内では第5波で自宅で亡くなったのは1人にとどまったが、今春の「第4波」では病床が逼迫し、重症化リスクのある患者でも入院ができず、少なくとも19人が自宅で亡くなった。

往診チームによると、▽乳幼児や介護が必要な高齢者がいる▽認知症などで療養先を見つけにくい▽ペットを放置できない―など様々な事情で自宅を離れられないケースもあるという。

懸念される「第6波」への備えとして、自宅療養者の手厚いサポート体制づくりが欠かせない。往診チームは、府や府医師会からバックアップを受ける。小林さんは「自分たちのような往診チームが他にも複数できれば、医療が逼迫した際のセーフティーネット(安全網)になる。第6波を想定し、効率的に動ける枠組みを作り上げていきたい」と話している。